

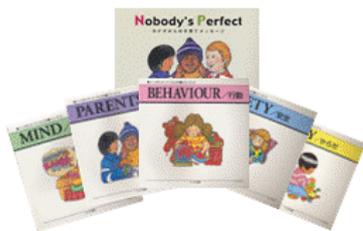
親自身に力をつける「ノーバディズ・パーフェクト」プログラム

ノーバディズ・パーフェクト部門代表 伊志嶺 美津子



これまでKRCとして展開してきた「ノーバディズ・パーフェクト（NP）」関連事業は、2012年度からCFRCノーバディズ・パーフェクト部門の事業として再出発することになりました。このNPプログラムは、私たちが1992年にカナダで出会い、子ども家庭リソースセンターが日本に紹介してきたものです。本格的な実践を始めたのはノーバディズ・パーフェクト・ジャパン（NP-J）に加入してKRCとしての活動を開始してからになります。以来2012年3月までに、CFRC（旧KRC）のNPJ認定ファシリテーターは406名、プログラムの実施が124回、参加した方は1211名となりました。

NPプログラムは、多民族が共存する高い人権意識に裏打ちされたカナダの文化が生み出したプログラムで、政府が推進しているものです。「完璧な人はいない、完璧な子どもも完璧な親もない」、親ははじめから親に生まれてはいない、子育ては一生かけて学んでいくもの、そのためには人の助けが必要といったメッセージが込められていて、政府が発行した分かりやすいテキストからも読み取ることができます。プログラムでは参加者自身の希望に沿ってグループで学びあい、自分たちの課題を解決していきます。NPファシリテーターが参加者の力を信じて各自の経験や価値観を尊重しながら進行していくので、参加者は親として自信をつけ、互いに支え育ちあって力をつけていきます。また参加者同士がつながって孤立から解放されていくことも、このプログラムの魅力であるといえます。



このNPプログラムに関心のある方、プログラムを進行するNPファシリテーターの資格取得を目指す方、親子にかかわる支援者に望まれる大切なことを学びたい方も、本会（CFRC）へのお問い合わせ、お申し込みをお待ちしております。

事務局の担当の川島さんを紹介します。

小学生のお嬢さんをお二人育てているお母さんです。事務所までは、自転車通勤。エネルギッシュですが細やかな心遣いができる方です。川島さんからの一言です。



はじめまして。今年4月より赤羽事務所にて事務を担当いたします、川島聡子と申します。皆様の活動の一助になれますよう努めてまいりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。子どもたちに残してあげられるものを意識し、日々伝えながら生きたいと思っています。

「レインボウ」の現在とこれから

レインボウ・ジャパン代表 檀田 紋子



私たちはこの10数年児童養護施設の小・中学生を対象にレインボウ・プログラムを実施してきました。2012年度からは改めて、児童養護施設で実施するレインボウに関しては、ボランティア（非専門職）の実施する「プチ里親レインボウ」と、心理士等（専門職）の実施する「レインボウ」の2コースに分け、各々の特徴を生かした活動を進めることにいたしました。

本プログラムは、研修を受けてレインボウ・ファシリテーターの資格を持った大人が、子ども達に安全・安心の場を提供し、子ども同士の支えあう力を促進し、一人ひとりの子どもの成長をサポートするものです。子ども達は同じ仲間と年間を通して参加し自分の気持ちと向き合うという体験のなかで、十分に表せなかったり伝えられなかった自分の本当の気持ちに気づき、正しくコントロールする力を養うことができるでしょう。そして、自尊心や自己肯定感、人間関係能力、自立する力など、健康に生きる力を身につけていくのだとおもいます。

私たちは実践を通して子どもたちの変化に手応えを感じつつ、このような中・長期的な展望を持った継続的な心のケアプログラムがさまざまな喪失体験を負った子ども達にはぜひ必要だと考えています。しかし、人的・経済的な資源は欠かせずその成果が直ぐには見えにくいこうしたプログラムを理解し実施にまで繋げるのは非常に難しいことなのだと実感しております。

今年度はレインボウ・プログラムも、シルバーライニング・プログラム（自然災害版）も新しい歩みをはじめつつあります。そこで、日本で初めて児童養護施設にレインボウ・プログラムを導入して今日まで長期に亘って実践をしてこられた子山ホームの森田施設長に、レインボウ・プログラムの成果について施設の立場から寄稿していただきました。多くの方々に読んでいただき新しい理解者、実践者・施設が広がっていくことを願っております。



「レインボウとの出会いから12年」

子山ホーム施設長 森田 雄司

【児童養護施設での戸惑い】

15年前、私は横浜から千葉の児童養護施設子山ホームに戻り、今まで経験したことのない子ども達の変化や対応に戸惑う毎日でした。それは、男性の私に小学校の女の子が些細な事で暴言や怒りをぶつけ、物は投げるは噛みつくは、拳の果てには立き叫び過呼吸になるという状況が毎日のように続き、いったい私たち施設職員は、この子ども達に何をしてあげたらよいのか、と日々悩み続けることでした。

【レインボウ・プログラムとの出会い】

当時は虐待という言葉がようやく世間一般に知られてきており、国も虐待を受けた子ども達に対して心のケアの必要性を認識し、心理士の配置もされ始めた頃でした。しかし、私たちにとっては、子ども達が

暮らす日常生活が癒しの場であり、子ども達と共に暮らすことが最も大切であるとの自負から、治療という心理療法は馴染めませんでした。そんな時、当時児童相談所の所長だった井上先生から、レインボウ・プログラムの創始者、スージー・マルタさんの来日に際し、児童養護施設の現場と交流をしたいとの話がありました。

【そして、導入の決断】

私は、まずレインボウの内容を知るべきと考え、子ども家庭リソースセンター主催の「親と子のよき相談・援助者のあり方」を考えるセミナーに参加しました。そこで「サラダボウルの国カナダ」の本を紹介され読んでいくうちに、ある担当の保育士が、よくホームで食事をしている時、誰かが自分の育ってきた環境の事や親にされたこと（虐待）を話し出すと、「そうだ、そうだ・・・僕もこうされた。」という話で盛り上がり、ひとしきり話した後は、みな落ち着いて食事を終えることが出来るとの話を思い出し、日常生活と心理治療の中間の支援として、傷ついた子ども達同士で癒しあう、そんな場を作ることが、私たちに出来る、最も身近な支援ではないかと気づかされました。



【児童養護施設でレインボウ・プログラムを始める】

実際にスタートした平成 12 年は、子ども家庭リソースセンターの先生方に交替で来ていただき、子ども達へのプログラムと施設職員に対しての「よき援助者のあり方」のセミナーの 2 本立てで実施しました。当時、私はファシリテーターとして参加しましたが、この時間・この場所の中では何を話しても（行っても）構わないとの約束事は、頭では分かっている、子どもたちの表現を受け止めることは簡単ではありませんでした。用意したマジックやのりが怒りの山として一回で使われ、普段から物を大切にと言っている仕事上の自分との矛盾に嫌になったこともありました。また、子どもが学校で「死ね。バカ。うざい。」などと書いた紙が問題となり、レインボウの説明を含め対応に追われたことを記憶しています。

【職員も変わった】

このように様々なことがある中でも、職員にはしっかりとした考え方として現れました。それは、両親別居中、母親（精神疾患）からの虐待との理由できた子どもが、入所にあたり、泣き叫び、それを見た母親が「本人を絶対離さない」と叫び、とてもスムーズに入所出来る状態ではなかったことがありました。ケースワーカーは、本人にわからないように母親は帰った方が良いと考えましたが、私たちは、どんな悲しいことも本人にきちんと話すべきと考え、母親からは無理でも、父親からならば可能であると思い、本人が納得出来るまで話してもらいました。本人は泣いてはいましたが、納得してからは両親を見送ることまで出来るようになりました。その後も母親と会うたびに涙を見せますが、大きく動揺することはなかったと思います。そして、プログラム実施中にこの子の母親は亡くなってしまいました。このような場合、家に行かせることで再び悲しみや動揺が増すという理由で、以前は絶対に行かせませんでした。

しかし、プログラムを行うことで、担当職員と共に母親と暮らした家を訪れ、思い出の品を持ち帰り、毎朝それを拝むことでその悲しみを乗り越えてゆく事が出来たものと確信しています。

【レインボウ・プログラムを継続する理由】

その後も、様々な年代の子ども達にプログラムを実施して 12 年。現在は、小学 3・4 年生を中心に行っています。それは、ちょうど思春期の入り口にさしかかり、自分を意識しながらも他者も思いやることのできる年代であると考えているからです。一人のファシリテーターに見せる普段の生活の



辛さ喜び、そして、自分の心に封印すべきと考えてきた家族への想い等、一人ひとりその子らしく、短いレインボウの時間で、安心して表現している様です。それは、最終回子ども達が、「もう終わっちゃうの?」「もう来ないの?」「またやりたい」との感想を述べていること、そして、ファシリテーターを担った方も、よっぽどの理由がない限り「もうやりたくない」との想いを持たず、来年は、どんな子と巡り合えるかと楽しみにしてくれている事に表れていると思います。そして、こんな経験をした子ども達は、いつまでも仲が良いのです。けっして能力の低い子でも馬鹿にせず、その子の良い所を認めています。それは、10年経っても変わっていません。このことは、レインボウを受けた子ども達だけの特徴かもしれません。なぜなら、その子ども達は、同学年であるということ以外、学校のクラス（一人は特別支援クラス）もホームも違い、共通した生活経験は少ないのです。唯一彼らは、レインボウという共通な時間を一年間持てたということで、仲間意識や絆が深まったと思われます。この絆は、彼らの財産です。私たちの出来る仕事は、施設にいる間に、どのくらいの財産を持つことが出来るのか、その財産を持って、一人で社会という荒波に立ち向かってゆく彼らに、幸せになってほしいと願うことしかありません。そして、子ども達も職員もファシリテーターを担う方も、一人の人間の力は小さいけれど、皆で支え合うことで、様々な悲しみを乗り越えてゆけることが出来る、そんな実感と共に、12年間レインボウ・プログラムと歩み、今後も歩み続けてゆきたいと思えます。

一か所でも実施する施設が増えることを願いつつ。



「フナ里親レインボウ」2011年度の活動

越智 三佳



2011年度のレインボウはA施設4名、B施設10名の小学4年生が、3名のファシリテーターと活動しました。20回のグループ・セッションの終了後は、単発のホラテアさんにもお手伝いいただいて2、3月に東京デイズニラウドへの遠足を行いました。

例年、小学4年生全員の参加をお願いしていますが、A施設では児童相談所の意向で4年生5人の内1人だけ参加できないお子さんがいました。また3月上旬になって突然、施設から児童相談所に移されたため、楽しみにしていた遠足に参加できないお子さんもいました。それぞれに止むを得ない十分な理由があつてのことでしょうけれど、「これ以上子どもを傷つけない」という鉄則を守ることが行政にとっていかに難しいかを痛感した2011年度でした。

さて、これまで「レインボウ」として続けてきた活動ですが、2012年度より児童養護施設で実施するレインボウは「フナ里親レインボウ」として一般のレインボウと区分けすることにいたしました。これはファシリテーター体験者の中から2人が里親へ移行していることから、レインボウの役目を「里親的なもの」として広げようという試みです。里親に興味はあるけれど一歩を踏み出せないでいる方の試体験、里親になる方への研修、里親にはなれないけれど寄付以上の援助をしたいと考えている方の活動の場として「フナ里親レインボウ」が役に立つことを願っております。

2012年度は子ども家庭リソースセンターの支援で「タイガーマスク基金」の助成金を受けることになりました。1人でも多くの児童養護施設の子どもの「フナ里親レインボウ」を体験してもらうために他の組織の協力を仰げるのは大変に嬉しいことと思っております。

「被災児のこころのサポートプログラム

シルバーライニング（SL）を実施して」 永田 陽子



【手をつなぎ合い、力を合わせて実現】

広域被災児・者のこころのサポートプログラム・シルバーライニング（SL）が、レインボウ・ジャパンの活動として、2011年10月日本に初めて導入されました。子どもたちの所に届くまでには、職種を問わず、さまざまな方たち、ざっと数えても60名以上の方たちの温かい思いと力とが結集されました。

プログラムを受けたのは、昨年の大震災と東京電力福島第一原発事故(2011)で会津若松市に避難をしている大熊町立の2校の小学2年生全員（表）です。SLファシリテーターとして、直接子どもたちに寄り添ってくださったのは大熊町教育委員会の酒井先生、夏目さんを代表とする読み聞かせの会のお母様方と郡山市にある特定非営利活動法人ココネットママでした。ママの首藤・鈴木両氏は、本会と連携をして、大熊町の方たちへのサポートを誠心誠意してくださいました。

【SLプログラム】

SLでは、クマのぬいぐるみを一人ひとりにプレゼントします。子どもたちは思い思いの名前をつけ、SLファシリテーターに守られた中で、自分の感情に向き合う体験を友達と一緒にします。自分の感情に気づき、不安に感じているのは自分だけではないこともわかります。そのような体験を通して、子どもたちの変化は起きました。プログラムの間、ずっと一緒だったぬいぐるみ、そしてプログラムで使用するジャーナルも指人形も、SL修了後の子どもたちを守る役目をします。

【子ども達の様子と変化】

ファシリテーターの方たちから繰り返し聞かれたのは、聴いているとどンドン子どもは話してくれる、子どもはこんなにいろいろな思いや考えを持っているのかという驚きの声でした。時には、課題とは、別のことをしたり、ファシリテーターが迎えに来てくれることを期待して場を外れる子もいたりと様々な場面があったと聞きます。「もう終わっちゃうの」「学校で楽しかったのは『スマイルタイム』』という子どもの声は、子ども達の内面がプラスの方に動いたことを示しています。

プログラム修了後、教室での子ども達の成長の姿を酒井先生が報告してくださいました。以前は、勉強がわからないと投げやりになっていた子どもが、素直に自分の気持ちを先生に伝えられ、「ありがとう」が自発的に言えたことは、忘れられないエピソードのひとつです。“やさしさ”を子ども達が発揮したくなっている姿に、酒井先生が強い感動を覚えられたのだと思います。

実践の途中で、再度の転居を余儀なくされ、せつなく感情を分かち合った友達との別れが起き、残る子も転居をしていく子も心が揺れたことがありました。揺れて当然です。その揺れをある子はぶつけた後に静まりました。SLの経験は、その時の感情に向き合うことをサポートしたと考えられます。「クマさんという時、お話ができるからほっとする」と気持ちをクマのぬいぐるみと一緒にそっと抱きかかえた子もいました。心が揺れる体験を除くことはできませんが、その向き合い方や表現の仕方を一人ひとりが変えることはできます。大変な時があっても、安全・安心・愛されている中で、気持ちに気づく体験は、子どもにとって貴重な体験となったことでしょう。

もうひとつ、大きな効果は、子ども同士のつながりです。プログラム中だけでなく、修了後もその効果が子ども達同士の間で持続されています。学校内で特別支援のクラスへ遊びに行くなど、お互いのかかわり合いが自発的な行動となって表れているとのこと。実施している間、ファシリテーターが心配するほど感情をぶつけ合っていた子ども達が、修了後は「私たち、友達になったの」と仲良くなっていました。プログラム内で甘えを受容された後、プログラム修了後子ども達だけにまかされた時、その体験が基盤となり子ども自身の力を発揮できたのだと考えられます。本来、子どもも大人も、よりよいものを求め育つ力を持っています。相互のかかわり合いが触媒のような作用をし、それぞれの力が発揮できたとも言えるでしょう。それは、本会が10余年継続してきた児童養護施設でのレインボウ・プログラム実践後の子ども達が見せてくれた成長にも示されています。

【ファシリテーター同士も支え合い】

シルバーライニングファシリテーター研修（2011年9月）を受け、子ども達に寄り添ってくださったのは、読み聞かせの会のお母様方とココネットマムの方たちでした。普段から子どもに関心を持ち、大熊町の子ども達のために活動をしていらっしゃるとはいえ、ファシリテーターとしての活動は初めての方たちで、それだけに、戸惑いも大きかったことでしょう。それに加え、本プログラムの日本での実践は初めてで、前例がないのです。毎週の準備の話し合いでは、様々な工夫がされていきました。「これがなかったら、外に出る機会がなく家で考え込んでいたと思う」「大変だけれど、これがあってよかった」「皆と話ができ心が軽くなった」などのファシリテーターの方たちの言葉からは、大人の方たちも互いに支え合う自助グループ的な作用が起きていることがうかがえます。

表：2011年度SL実施状況

実施期間	小学校名	児童数
2011.10-11	大熊町立大野小学校	40
2011.11-2012.2	大熊町立熊町小学校	20



【SLのこれから】

さまざまな効果の得られたSLプログラムは、2012年度も同校での継続実施が早々と決まり、5月からスタートしています。この3月には東京近辺のSLファシリテーターも誕生し、避難先での実施体制も整ってきました。皆さまのご協力を頂きながら、今年度も続けてまいりますので、よろしくお願いたします。

準備段階から、翻訳・編集、プログラムのための資料、パペット、ビンゴゲーム、お手玉等々の作成などにお力添えを頂いている方々に、この紙面を借りて、心から感謝を申し上げます。



〔シルバーライニング(SL)〕はこんな意味です
 ・ どんなに暗い雲にも、銀色に光る(シルバーライニング)裏側がある」という西洋のことわざに習い、どんなにつらい出来事にも、必ずどこかに希望がある。

「 information 」 子ども家庭リソースセンターからのお知らせ

2012年度スケジュール

1. NPプレプログラム オリエンテーション
4/22 (日)、10/14 (日)、2回開催 時間は両日ともに 13:00~16:00 受講料 1,500 円
2. NPファシリテーター養成講座
(1) 通常講座 1期 5/19, 20, 26, 27 永田 陽子
2期 8/18, 19, 25, 26 永田 陽子
3期 11/23, 24, 25, 26 伊志嶺 美津子
4期 2/10, 11, 16, 17 福川 須美
(2) 出張講座 2011年度は長野県上田市、栃木県益子町、佐賀県、秋田県、埼玉県加須市、岩手県岩手市などで6回開催
3. NPアフタープログラム
2012/7/29(日)、2013/1/20(日)
「フォローアップ研修」 9:30~12:00 「ステップアップ研修」 13:00~16:00 受講料 3,000 円
4. トポスの会
2012年度 6/24、9/2、12/2、3/10 いずれも日曜日 13:00~16:00 年会費 2,000 円

各種手続き

トポスの年会費……トポス通信 2012 年度 1 号にてお知らせいたしましたが、今年度より年会費額や振込口座等が変わっておりますので、ご注意願います。ご入会は随時受け付けております。

寄付のお願い

被災児の心のサポートプログラム実施のために、ぬいぐるみや材料費、被災地へ出向く交通費等が必要です。皆さまからのご援助をお願いいたします。

<振り込み先> ゆうちょ銀行にある振り込み用紙から振り込みが可能です。

口座記号・番号 00130-4-651522

加入者名 NPO 子ども家庭リソースセンター

～ ご意見・ご要望・ご質問等ございましたら、下記事務局あてにお気軽にご連絡ください ～



NPO 法人 子ども家庭リソースセンター

- 所在地 〒115-0055 東京都北区赤羽西 1-33-3
ライオンズタワー907号室
- TEL/FAX 050-5202-7865
- E-mail info@kodomokatei.com
- URL <http://kodomokatei.com/>
- 交通機関 JR 線「赤羽駅」下車、徒歩3分
地下鉄南北線「赤羽岩淵駅」下車、徒歩15分



○編集後記

活動を通じて、手をつなぐことの強さを感じています。

編集：NPO 法人子ども家庭リソースセンター
発行：NPO 法人子ども家庭リソースセンター
発行日：2012年6月10日